

新歴史の見える風景

大塩城と大塩八幡宮

越前市国兼町 22

木曾義仲が本陣を置き
南北朝期には南軍の一翼を担う



▲寛平3年(891)に京の石清水八幡宮から勧請されたものと伝わる大塩八幡宮

神社奥に木曾義仲本陣跡伝承地の碑が建てられている▶

源平合戦の際、木曾義仲は倶利伽羅峠の戦いで平氏に勝利し、その後、上洛のため北陸道を南下して越前国府(武生)に入り、大塩八幡宮の境内に本陣を置いた。寿永2年(1183)6月のことである。神社の奥には義仲の本陣跡伝承地の石碑が建てられて、伝承についての案内板、堀切跡の碑も設置されている。

義仲はここにしばらく滞在し、京の情勢把握や入洛に向けた打ち合わせを行い、7月には入洛している。

この地が再び歴史に登場するのは、南北朝の争乱である。建武3年(1336)10月、新田義貞ら新田軍は越前に下り、宮方(南軍)として越前守護・足利尾張守(斯波)高経と激戦を繰り広げた。義貞が立て籠もった金ヶ崎城が足利軍の攻撃により落城すると、これを見届けたうえで高経は上洛した。しかし義貞は、落城に先立って杣山へ脱出しており、高経不在の間隙を縫って越前国内で

MAP



兵を募り、反撃の準備を進めた。

この情勢を受けて高経は府中(武生)の新善光寺城に戻り、新田軍と対峙し、日野川の合戦に至った。激戦となり容易に勝負がつかないなか、新田軍の一部は、高経の拠点である府中に火を放ち、高経を「足羽の城」へ追いやる成果を挙げた。大塩城から出撃した兵もこの戦いに加わった。

しかし、つづく「足羽七城での戦い」の最中、義貞は灯明寺で戦死し、新田軍は崩壊した。義貞の弟脇屋義助は残った兵をまとめ、府中や杣山へ退いて再起を図った。義助はその後、「足羽の城」を再び攻撃し、高経を一時的に加賀へ退かせることに成功したが、北軍は、援軍の到着とともに反撃に転じ、次第に戦況は北軍優位に展開していく。府中から妙法寺、大塩などこの一帯は、杣山を拠点とする南軍と北軍

の戦いの最前線となった。

暦応3年(1340)の秋には、北軍は府中を奪還し、さらに府中から杣山にかけての妙法寺城、大塩城、さらに脇屋義助が籠もる平葺城も次々に落とし、義助を美濃へ敗走させた。翌年には、北軍はなおも抵抗を続けていた杣山城と大滝城を攻略し、この地の南軍を掃討した。最後まで抵抗していた畑時能も伊地知山にて憤死し、ここに越前の南軍勢力は一掃された。

大塩城は 大塩八幡宮の背後の矢谷山に築かれ、木曾義仲の本陣伝承地から25分ほど登ると展望所と呼ばれる高い尾根に到着する。ここには「大塩山城趾」の石柱が建てられており、さらに尾根づたいに約500メートル進んだ山頂に主郭がある。近くには大きな堀切も残され、頂上周辺は人を寄せ付けないほどの急斜面となっている。

(文 奥山秀範)



▲中腹の「大塩山城趾」碑、近くに見晴らしの良い展望所がある



▲山頂一帯(大塩城主郭)